

R. S. コーワン著／高橋雄造訳
『お母さんは忙しくなるばかり』
——家事労働とテクノロジーの社会史』

評者：榎 一江

「19世紀の工業化と20世紀の家庭電化は、お母さんたちの仕事を本当に楽にしたのだろうか？」という文章にひかれ、思わず手を伸ばしたのが本書であった。「お母さんは忙しくなるばかり」とは、フルタイムで働く母としての実感ではある。しかし、一般的には、テクノロジーが家事労働を軽減させたと信じられている。はたして本書の含意とは如何なるものなのか。興味を持つのは、筆者だけではあるまい。さっそく、技術史の観点からアメリカにおける家事労働の歴史を分析した本書の概要を紹介しよう。

第1章「序説——家事労働とその道具」は、労働史研究が、主として「市場労働——販売される製品やサービスを生産するための労働」に焦点を当ててきたのに対し、家事労働の歴史研究の重要性を指摘する。同時にそれは、家事労働に使われる道具の歴史とともに理解すべきであるという観点から、「労働過程 (work process)」と「テクノロジーシステム (technological system)」という二つの概念が設定される。本書は、この二つの概念を使って、過去100年間に米国の家庭に生じた変化を描きだすものである。

付言すれば、「労働過程」という訳語はマル

クスのそれを連想させてしまうかもしれないが、ここでは、家事労働がどの一部分も単純で均一ではないことを強調するために「労働」の代わりに使用されている。たとえば、洗濯はただ布を洗うだけでなく、洗濯物を集めて運び、乾かし、アイロンをかけ、しまうという作業によって成り立ち、石けんや水を調達する必要もある。このような一連のプロセスに注目すると、たとえば工業化が家事を楽にしたのかという問いに対し、誰にとって、どういう作業が楽になったのかを理解することが可能となる。こうした分析こそが家事労働の研究には不可欠であるというのが、著者の主張である。

第2章「主婦であること——工業化以前における家事労働とその道具」は、18世紀および19世紀の家事労働に使われた道具を通して、仕事場を男の「場所」とし、家を女の「領分」とする「男女別領域の教義」がなぜ支配階級の利益にかなない、工業社会の形成を促進したのかを示す試みである。そもそも、工業化以前の経済社会においては、生活を維持するために成人男女の複数が必要であり、家政における労働の性別による分業が見られた。また、道具類を調達するために市場経済に参加することが要求されたが、たくさんの道具を持つ富める人がより多くの収穫を得られる社会でもあった。貧しい人は少ない道具しか持っていないのに、食料、衣類、住居といった生活必需品を提供する市場の変動に影響されたから、生活水準を上げるためには、夫婦それぞれがより懸命に働き、道具を大事にするほかなかったのである。こうしたくらしは、工業化後に一変する。

第3章「家事労働のはじまり——工業化の初期」は、20世紀に「家事労働」(housework)とよばれるようになった「女が家庭でする仕事」と工業化過程との関係を見る。重要なのは、工業化によって導入された新しい道具は、両性の

仕事を等しく軽減したのではなく、家庭内で男が担当していた仕事を減らしたという点である。たとえば、製粉業の発展により人々が小麦粉を購入し始めると、従来男の仕事であった粉挽きが姿を消し、女は毎日パンやケーキを焼きはじめた。家事は両性が分担しなければ成り立たない労働から、本当に「女の仕事」になったのである。さらに、男が外へ就業機会を求めるようになる一方で、女の家庭内での仕事は重くなっていき、こうした生活パターンが世代を経て固定化していったという。

第4章「20世紀における家事テクノロジーの変化」は、20世紀のテクノロジーが家政を生産の単位から消費の単位へと転換したという理解に異議を唱える。ここでは、家事テクノロジーを1つではなく8つの相互にからみあったテクノロジーシステムとして見る。そして、食料、衣服、保健については、生産から消費への移行が1930年までに完了したのに対し、反対方向の変化が進行していたというのが、本書の主張である。たとえば、交通・運搬システムに関して、主婦は購入したものを受け取る立場から運搬する立場に変わり、とりわけ第一次大戦後の自動車の普及が運搬を主婦の仕事としたという指摘が興味深い。また、水道、ガス、電気、石油類についても、同様の変化が起きた。近代的な水道システムの導入により、清潔なトイレ、浴槽、流しを女が「生産」しなければならなくなったごとくである。総じて、労働の性質は変化したがる、目的は変わらず、時間のかかる労働の必要もそのままであった。

第5章「たどることのなかった道——家事労働のもう一つの社会的・技術的アプローチ」では、家事に関して定着しなかったいくつかの試みを検討する。家事労働の企業化は、成功するものもあったが、失敗も多かった。たとえば、商業ランドリーは電気洗濯機の普及によって衰

退した。結局のところ、米国人は、家族生活と自治を維持するため、単一家族家庭や道具類の自家所有を選択した。「女に家事をやらせる制度」は、19世紀に形成され、20世紀に生じた大きな変動にもかかわらず強固に残ったのである。

第6章「1900～40年の家事テクノロジーと家事労働」は、技術的・社会的変化が激しかったにもかかわらず、家事が「女の仕事」であり続け、それを女たちが了解していた理由を探る。20世紀初頭にあった貧富両階層に属する女性たちの間の根本的差異は、戦間期に変化し、健康で見苦しくない最低水準の生活を多くの人々が享受できるようになった。古い道徳観念では、妻が外で働いていることは経済的困窮と社会規範からの逸脱を意味していたが、新しい文化観念では、子供たちの生活や教育・文化の程度を向上させるのは両親二人の責任となった。そのため、低所得の主婦たちはより高い生産性へと突き進み、激しく働くことによって、ガスレンジや洗濯機などを購入して生活を向上させることに成功した。こうして、女たちは自分の居場所を家庭と信じ、そこでしている仕事に価値を見出した。新しい道具を、抑圧よりも自由をもたらすものとして歓迎したのである。

第7章「第二次世界大戦後」は、戦後も豊かさのひろがりと便利な設備の普及が主婦の余暇の増大にはつながらず、主婦の仕事が増すばかりであったことを描く。ただし、それまでと大きく異なっていたのは、多くの既婚女性が労働力として外で働くようになった点である。一般には、新しいテクノロジーの広範な普及が、この変化の原因であると信じられているが、そうではないと著者はいう。米国の主婦はまずフルタイムの雇用を求めたのであり、その次に皿洗い機と洗濯機があり、時に冷凍食品を夕食にすれば、家族の生活程度を落とさずにフルタイムで働ける、といった事態が進行したのである。

つまり、新しい家事テクノロジーは女性を家事労働から解放しなかったが、家事を補助者なしに、フルタイムで遂行しなくても見苦しくない生活程度を維持することを可能にした。こうして、新しい家事テクノロジーは、既婚女性の労働市場への参入を容易にしたのであり、それは、従来の規則を変える機会をもたらすものでもあった。

終章「お母さんの労働は減るだろうか」は、テクノロジーシステムを支配している暗黙の規則から自由になることを説く。具体的には、週1回シーツを変える、流しを一点の汚れもないように磨く、食事ごとにテーブルをふく、子供に音楽のレッスンを受けさせる、といったことを指す。必要以上の家事を生じさせている暗黙の規則について、その歴史を明らかにすることによって、規則を意識し、その効果を薄めることが可能となる。そうして、テクノロジーシステムにコントロールされるのではなく、これをコントロールできるようになれば、その時に初めてお母さんの労働は減るであろうというのが著者の結論である。

ところで、原著が刊行されてからすでに四半世紀が過ぎている。しかし、本書から導き出された結論や基本的な考え方に変更はないという。著者の主張は、以下のとおりである。

①家事 (housework) は仕事 (work) であり、それゆえ、使用する道具とこの道具を含むテクノロジーシステムを研究すべきである。②家事は労働過程として研究されるべきである。家事に関するいろいろな仕事を家庭外でしているさまざまな人々が、これに関与しているからである。③家事をするために使う道具は、いくつもの異なるテクノロジーシステムの一部である。④これら道具とテクノロジーシステムにおける変化は、労働の節約になった場合はあるけれど

も、時間と労力の増加が必要になった場合もある。⑤20世紀後半の米国において、圧倒的多数の女性は、家庭の生活水準を維持し向上させるためにそれまでよりも多くの労働をすすんで引き受けた。⑥家事労働の時間研究をした学者は、テクノロジーの「進歩」によって家事労働が非常に軽減されたという結論には達しなかった。⑤がその理由である。

以上のアメリカの家庭に生じた変化は、日本の歴史を理解する上でも重要な示唆を与えてくれる。実際、労働史研究において家事労働の研究は等閑に付されてきたし、家事労働を議論する際も、女性を家事労働の担い手とするものの是非をめぐる言説分析に傾斜しすぎたきらいがある。本書は、実際にそれがどのように遂行されていたかを技術史の観点から描くという手法をとることによって、家事労働が歴史的に軽減されてきたという一般的な理解に疑問を呈している。これは、日本の事例に即して、検討する必要がある課題であろう。その際、注意を要するのは、直系家族という家族の形態が家事労働のあり方をどのように規定したかという点である。また、日本においては、他の社会制度と同様に、性別分業に基づく家事労働のあり方がある種の理想像として輸入された側面を理解する必要があるように思われる。それがテクノロジーの進歩とどのような関係にあったのかは、興味深い論点となるだろう。

若干の感想を述べれば、アメリカにおいて、工業化に伴う新しい道具の導入が男の家庭内での仕事を減らし、女の仕事を増加させたという具体的な事例は興味深く、さらに、男が外へ就業機会を求め、残された仕事に女が従事する慣行が世代を経て固定化したという指摘も説得的であった。ただし、なぜ、男の仕事を減らす道具が開発され、導入されたのかは説明されてい

ない点が残念である。新しいテクノロジーの導入がどのような影響を与えたかは鮮やかに示されているが、そもそも、そうしたテクノロジーの開発がなぜ進められたのか、という問いは、封印されたままで良いのだろうか。やや疑問の残る点である。

ところで、20世紀後半の米国において、アメリカの女性たちが、家庭の生活水準を維持し向上させるためにそれまでよりも多くの労働をすすんで引き受けたという指摘は重要である。彼女たちは、骨折り仕事を強いられたのではなく、その意義と重要性を確信しており、そうであるがゆえに、第二次大戦後にはフルタイムの雇用を求めた。日本の場合、よく知られているように、既婚女性の労働市場への参入はもっぱらパートタイマーという形態をとり、主婦であることとの両立が図られていた。こうした事態も、家事労働やその技術史的なあり方から接近することが可能かもしれない。本書を通して、日本の歴史研究における重要な課題を見出すこともできるであろう。なお、現状については、品田知美『家事と家族の日常生活—主婦はなぜ暇にならなかつたのか』(学文社、2007)が参考となる。

最後に、「21世紀の日本の主婦は、本書を読んでどう思うだろうか？」(244頁)という訳者あとがきにこたえよう。現状は、フルタイムの主婦を想定したテクノロジーの開発から一歩進んでいるといえるだろう。たとえば、我が家では就寝中に全自動洗濯機が洗濯を終わらせている。また、食洗機とロボット掃除機2台が、外出時に家事の一部を遂行することによって、なんとか見苦しくない生活を維持している。もちろん、この新たなテクノロジーは、使い終わ

った食器を食洗機にセットし、洗い終わった食器を棚に収納するとか、掃除機が動きやすいようにちらかった床を片づけるといった新たな仕事を必要とするから、どれだけ時間が短縮されたか不明である。朝出かける前の限られた時間に、これらの仕事を担当するのは主に夫であり、主婦の仕事は軽減しているかに見える。しかし実際には、この間、母である筆者は子供を着替えさせ、洗面所に連れて行き、連絡帳を書いて登園準備をするなど慌ただしく過ごしている。

21世紀の日本では、家庭の生活水準を維持し向上させるため、機械を導入して効率化を図り、家事労働を夫婦で分担することが望ましいとさえ考えられている。こうした家事労働を女性が一人で担うべきだと考えられていた時代に比べれば、その変化はとても大きいように見える。それでもやはり、道具を自家所有し、単一家族で家事を遂行するという家事労働の基本的なパターンは変わっていない。著者が指摘するように、家事労働が感情を伴う労働であり、強固にできあがった社会的仕事であるからであろう。かつて、衣服等を生産していたのと同様に、現在の家事労働は、健康な人々を生産しているのだという著者の日本語訳に寄せられた主張は、基本的に正しいように思われる。ある種の規則からは自由であるつもりだが、「子供に音楽のレッスンを受けさせる」ために若干の無理をしている筆者の現状が、それを物語っている。

(ルース・シュウォーツ・コーワン著／高橋雄造訳『お母さんは忙しくなるばかり——家事労働とテクノロジーの社会史』法政大学出版局、2010年、3800円＋税)

(えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所准教授)